

自己概念に及ぼす血液型ステレオタイプの影響 およびバーナム効果の検討¹

The effects of “blood type stereotype” on self-concept.

杉 山 幸 子

要約 ABO式の血液型と性格が関連しているという説は70年代から流行し、現在に至るまで人気が衰えていない。これだけ長期に渡って世間に流布すると、それが人々の自己観に取り込まれた結果、自己概念に血液型による違いが生じている可能性が考えられる。そこで、ここでは性格ではなく、自己概念に及ぼす血液型ステレオタイプの影響を検討する。血液型得点を比較した結果、ステレオタイプとして明確であるA型の得点について、A型の人の得点が他の血液型の人より高いという結果が得られた。また、特に代表的なステレオタイプ項目について、血液型によって自分に当てはまると考えている人の割合に違いがあることが分かった。一方、血液型が「当たる」と受け止められる理由のひとつであるバーナム効果についても検討し、いくつかの項目についてそれが認められた。

1. は じ め に

人の性格を研究する領域は性格心理学、人格心理学、パーソナリティ心理学などと呼ばれ、多くの研究者が独自のパーソナリティ理論を作り上げているが、世間にはそれらとは全く異なった起源をもつ、いわば世俗のパーソナリティ理論が存在する。県民性(お国柄)や星座占いなどもそのひとつにあげられるが、日本で最も広く普及しているのは何といっても血液型に基づく性格判断であろう。

佐藤・溝口(1992)によると、血液型に基づいて性格や相性を判断する説は何人かの先人の後に教育学者の古川竹二によって創案され、当時は心理学の専門誌にも掲載されたが、結局は学問的に否定され、葬り去られてしま

う。それが1970年代に能見正比古によって世俗の世界で復活し、若い女性を中心に流行して、現在では日常生活のさまざまな場面で血液型への言及がなされるに至っている。

この血液型に基づいたパーソナリティ「理論」(血液型性格学、血液型人間学、血液型性格関連説などといわれる)を支持する研究者は現在の日本の心理学界では見当たらないが²、一方でそれを批判的に検証したり、興味深い(怪異な)社会現象として検討したりしている研究は少なくない。前者としては、能見の主張の裏付けとして用いられている統計資料のずさんさ、論理構成の非科学性を指摘するもの(例えば、村上, 2005; 大村, 1998)、血液

型と性格の関連可能性を生物学的・医学的な見地から否定するもの、さらに、性格検査などの心理学尺度を用いて血液型とパーソナリティとの関連の無さを統計的に検証した研究が多く見られる（例えば、藤田, 1996；長谷川, 1987；大村, 1993, 1998）。しかし、松井（1991）が指摘するように、批判論の側の研究にも統計学の問題は同じく存在しており、その意味では厳密に統計学的に血液型と性格との関連性を否定できているのは松井自身の研究を除いてはほとんど見られない³。また、統計学的面は別としても、批判者自身の論理構成が恣意的で「初めに結論ありき」と見なされる例が散見されるのは残念である⁴。

これに対して、血液型性格関連説を「俗説」、「ステレオタイプ」ととらえ、それが広範な人々の支持を得ているという社会現象にアプローチした研究群があり、その多くは社会心理学的なものである。この場合、その説の科学的な是非は問題にならないが、多くの場合は非科学的な俗説、似非科学との前提に立つか、もしくはその問題についての態度を保留しているようだ。こちらの研究では、人々の血液型ステレオタイプへの態度、ステレオタイプの内容、構造、機能、それが形成・維持される仕組みなどに焦点が当てられる（岩井・鷹野, 1994；松井・上瀬, 1994；佐藤, 1993；丹治・青木, 2001を参照）。また、ステレオタイプへの信念が強い人の心理特性を明らかにしたり（詫摩・松井, 1985）、その信念を解消しようとする試みも認められる（上瀬・松井・古沢, 1991）

このように多角的な研究が行われているのは、おそらく、科学的・心理学的な裏付けの

ない世俗のパーソナリティ理論が人口に膾炙しているという事実が、それを信じていない心理学者にとっては不思議であり、興味深く、あるいは腹立たしいからだろう。では、そもそも世間の人々はなぜ「血液型」というものにそれほど魅力を感じるのだろうか。

日本における人気の理由としては、西洋での占星術のようにそれ以前に社会に根を張ったタイプ論が存在しなかったこと⁵、伝統的に「血」へのこだわりが強く、また、学校教育によって血液型や遺伝についての一般的な知識が普及し、かつ、ほとんどの人が自分の血液型を知っていること、南（1983）が指摘するように、日本は「型の社会」であり、古くから「〇〇気質」というように類型論への関心が高かったこと、さらに、日本だけに当てはまることではないが、4というタイプ数が認知的に適正であることなど、さまざまに指摘することができる。また、前述のステレオタイプに関する諸研究もその人気（ステレオタイプの強固さ）の一端を明らかにしている。だが、これらは皆「外」からの理由づけである。これに対して、信じている人々の内的な理由として最も重要なのは「経験的に当たっている」ことだという（上瀬・松井・古沢, 1991）。つまり、自分や身近な人の性格が血液型性格関連説に当てはまるという経験を多くの人はもっているわけである。

この「当たっている」という感覚をもたらす原因として、村上（2005）はバーナム効果を指摘している。バーナム効果とは、多くの人に当てはまるような一般的なパーソナリティ記述を、自分（だけ）に当てはまる正確な記述として受容する傾向のことを指す⁶。いうまでもなく、性格検査ではそうした項目

は避けなくてはならないが、血液型性格関連説に用いられる項目の多くにはバーナム効果が認められるという。つまり、人は自分の血液型を説明する部分しか読まないのだから「当たっている」と感じるが、実際には他の血液型について読んでも同じように感じると考えられる。また、身近なところで血液型の分布に偏りが見られるという経験（たとえば、自分の所属するサークルのメンバーの10人中8人がB型だったなど）も血液型への信念を強める働きをしているが、これは前述の能見の主張に用いられるデータと同様、統計学的には意味のない、単なる偶然（誤差）に過ぎない。

さて、ここで注目したいのは、血液型性格関連説が自己概念にもたらす影響である。つまり、物心がついて以来、人は親の言葉を初めとするさまざまな手がかりを用いて自己概念、自己イメージを形成し続けており、その作業はおそらく終生止むことはない。手がかりとなるのは主に他者による評価だが、血液型や占いなどによってもたらされる評価も当然そこには含まれるはずである。特に、血液型は世間に流行してから既に30年以上の歴史を有しており、現在の子ども、青年は幼少の頃から周囲の言葉やメディアを通してその言説に親しんでいる可能性が高い。だとすれば、その内容がいかに科学的には根拠のないものだとしても、人々が自己概念のなかに取り込んでしまっていることで、結果として自己概念に血液型による違いが生じているのではないだろうか。

このような現象は、「予言の自己成就」とか「自己成就的予言」といわれるものに通じている。ただし、注意が必要なのは、ここでは

性格ではなく、あくまで自己概念における予言の成就を問題にするということである。たとえば、「お前は悪い子だ」と親に言われ続けた子どもが、長じて非行や犯罪に走るようになったとすれば、行動のレベルにおいて予言が成就したといえる。しかし、「慎重なA型」というラベルを貼られて成長した人が「自分は慎重な人間だ」と考えているとしても、その人が本当に慎重な性格であるとは限らない（厳密に言えば、慎重な行動をする人間であることを保証しない）。佐藤・渡辺（1992）はこの問題について、「自分についての知識が自分の行動に影響することは充分考えられる」ので、行動のレベルにおいて血液型性格関連説による自己成就が生じる可能性はあるとして、その場合は『『血液型ごとに性格は異なっている場合もある』などとは言わずに『血液型役割の取得が進んでいる』と考える方がよいだろう」と述べる。これはたいへん興味深い指摘だが、本論では行動のレベルは問わず、あくまで自己概念と血液型性格関連説の関係に注目したい。

これまでのところ、自己概念に及ぼす血液型ステレオタイプの影響を検討した研究はあまり見当たらない。関根（1998）は血液型性格論に対する態度と状況（血液型を意識しているかどうか）によって、自己の性格認知に違いが生じるかどうかを検討したが、それを裏づける結果は得られなかった。しかし、あえて自己概念といわなくとも、自己評定によって性格をとらえようとしている研究の成果は、その手法の性質からいって、そのまま自己概念へと適用することが可能である⁷。

松井（1991）はJNNデータバンクの4年度分の調査結果を用いて、「誰とでも気軽につき

あう」「目標を決めて努力する」などの性格・人柄に関する24項目の血液型別の肯定率を検定し、4回の調査で共通して有意差の見られた項目は1つだけで、しかも肯定率の高い血液型は年度によって異なることを示し、血液型ステレオタイプは妥当性を欠くと結論している。だが、興味深いことに、注のなかでその項目（「物事にこだわらない」）への肯定率は一貫してA型が最も低く、A型とその他の血液型の間で差の検定を行うと、いずれの年度でも有意差が認められることを示した。さらに、その差の傾向は年度を追って増加していることに注目し、予言の自己成就現象が進行している可能性を示唆している。松井によるこの結果を受けて、山崎・坂元（1992）は同じJNNデータベースの11年度分のデータを用いて、各項目への反応を各血液型得点に変換し、それが回答者の血液型と調査年次によってどう変化するかを検討した。その結果、A型者のA型得点は年ごとに上昇している（その他の血液型の人のA型得点は年ごとに下降している）という興味深い結果を示している。

本論では血液型パーソナリティ理論を信奉する者が多いと思われる10代から20代の女性

（主に短大生）を対象として、彼女らの自己概念に血液型による違いが見られるかどうか、また逆に、血液型に関係なく大半の人が自己概念に取り込んでいる性格特性が認められるかどうか（バーナム効果）を検討する。検討する仮説は以下のようにまとめられる。

仮説1：血液型性格関連説の妥当性は全体としては認められない。

仮説2：ある血液型の性格特性として広く認められている項目は、その血液型の人々が自己概念に取り込みやすい。したがって、そうした項目については血液型による違いが見られる。

仮説3：どの血液型の人でも高い割合で自分に当てはまると考える項目が存在する。

ここで注意が必要なのは、血液型性格関連説が広く普及しているといっても、実際には個々の人々が認識している内容に少なからぬ違いが見られるということである（渡辺, 1994）。したがって、多くの人々が共通して認識している代表的な（まさにステレオタイプの）項目についてのみ、血液型による違いが認められると考えられる。これが仮説1と2の理由である。

2. 方法

質問紙の作成 血液型性格関連説として鈴木（1984ab）を選び、それに基づいて各血液型の特性を示すとされる項目を11個ずつ作成した（表1を参照）。なお、複数の血液型の特性とされている性格特性がかなりあったが（特にAB型とA型、B型との重複が多かつ

た）、それらはどちらの血液型の項目としても採用しないことにした。回答者には自分に当てはまると思う項目を選んでもらった。

調査時期 平成17年10月～11月。

対象者と手続き 八戸短期大学幼児保育学科の1年生に授業時間を利用して回答しても

表1 各血液型「らしさ」の判断（％）

	項 目	A	B	O	AB
A-1	謙虚である	75.0	0	12.5	6.7
A-2	心配性である	<u>87.5</u>	6.3	6.3	0
A-3	内気である	75.0	12.5	0	0
A-4	態度をとりつくろう	31.3	18.8	25.0	18.8
A-5	意志が強固でない	25.0	37.5	25.0	12.5
A-6	決断力に乏しい	18.8	12.5	62.5	6.3
A-7	自分をまげやすい	43.8	25.0	25.0	0
A-8	非社交的である	37.5	25.0	12.5	18.8
A-9	悲観的である	68.8	12.5	0	12.5
A-10	感情に動かされやすい	31.3	18.8	37.5	12.5
A-11	慎重である	<u>93.8</u>	0	0	6.3
B-1	社交的である	0	25.0	68.8	0
B-2	楽天的である	6.3	43.8	37.5	6.3
B-3	にぎやかである	0	25.0	50.0	18.8
B-4	衝動的である	18.8	50.0	31.3	0
B-5	移り気で飽きっぽい	12.5	56.3	12.5	18.8
B-6	感覚が鋭い	25.0	12.5	12.5	43.8
B-7	刺激に敏感である	62.5	6.3	12.5	6.3
B-8	思い切りがよい	18.8	25.0	37.5	18.8
B-9	少しのことですぐ動揺する	75.0	6.3	0	12.5
B-10	おしゃべりである	6.3	43.8	43.8	0
B-11	執着心がない	18.8	37.5	25.0	12.5
O-1	淡泊である	18.8	50.0	6.3	6.3
O-2	常に冷静である	50.0	6.3	12.5	31.3
O-3	押しが強い	6.3	56.3	31.3	0
O-4	意志が強固である	31.3	43.8	18.8	6.3
O-5	自信が強い	12.5	43.8	37.5	6.3
O-6	ものに動じない	25.0	18.8	31.3	18.8
O-7	感情を抑えることができる	56.3	6.3	18.8	12.5
O-8	包容力がある	6.3	6.3	<u>81.3</u>	0
O-9	決心のあと迷わない	0	43.8	31.3	25.0
O-10	個人主義に傾きやすい	12.5	56.3	6.3	25.0
O-11	エネルギーッシュである	0	62.5	25.0	6.3
AB-1	人には丁寧に接する	<u>81.3</u>	0	12.5	6.3
AB-2	他人をあまり意識しない	0	68.8	6.3	25.0
AB-3	神経質である	<u>93.8</u>	0	6.3	0
AB-4	カンが鋭い	18.8	6.3	18.8	50.0
AB-5	人とうちとけやすい	12.5	18.8	62.5	6.3
AB-6	気分にもuraがある	25.0	25.0	6.3	43.8
AB-7	人の気持ちをとらえるのがうまい	37.5	6.3	25.0	18.8
AB-8	よく気がつく	68.8	18.8	0	6.3
AB-9	文句が多い	0	68.8	31.3	0
AB-10	短気で怒りっぽい	12.5	56.3	18.8	6.3
AB-11	くよくよしやすい	75.0	0	18.8	0

表2 血液型ごとの選択率 (%)

項 目	A	B	O	χ^2	
A-1 謙虚である	44.7	30.6	44.7	2.10	
A-2 心配性である	85.1	80.6	78.9	.59	
A-3 内気である	55.3	50.0	36.8	2.96	
A-4 態度をとりつくろう	36.2	22.2	26.3	2.11	
A-5 意志が強固でない	34.0	27.8	18.4	2.59	
A-6 決断力に乏しい	51.1	38.9	57.9	2.73	
A-7 自分をまげやすい	34.0	27.8	28.9	.44	
A-8 非社交的である	23.4	27.8	18.4	.91	
A-9 悲観的である	42.6	33.3	31.6	1.29	
A-10 感情に動かされやすい	74.5	61.1	65.8	1.76	
A-11 慎重である	57.4	13.9	34.2	16.76	**
B-1 社交的である	46.8	30.6	52.6	3.94	
B-2 楽天的である	44.7	44.4	42.1	.96	
B-3 にぎやかである	36.2	52.8	57.9	4.45	
B-4 衝動的である	31.9	36.1	34.2	.16	
B-5 移り気で飽きっぽい	40.4	75.0	47.4	10.45	**
B-6 感覚が鋭い	29.8	30.6	31.6	.03	
B-7 刺激に敏感である	46.8	38.9	28.9	2.82	
B-8 思い切りがよい	29.8	36.1	47.4	2.80	
B-9 少しのことですぐ動揺する	57.4	52.8	55.3	.18	
B-10 おしゃべりである	38.3	58.3	39.5	3.90	
B-11 執着心がない	8.5	19.4	10.5	2.42	
O-1 淡泊である	14.9	22.2	23.7	1.20	
O-2 常に冷静である	29.8	13.9	10.5	5.93	+
O-3 押しが強い	23.4	19.4	23.7	.24	
O-4 意志が強固である	38.3	38.9	57.9	3.94	
O-5 自信が強い	8.5	25.0	15.8	4.18	
O-6 ものに動じない	17.0	25.0	18.4	.88	
O-7 感情を抑えることができる	44.7	36.1	44.7	.76	
O-8 包容力がある	23.4	22.2	23.7	.02	
O-9 決心のあと迷わない	19.1	13.9	28.9	2.66	
O-10 個人主義に傾きやすい	23.4	27.8	23.7	.24	
O-11 エネルギッシュである	29.8	36.1	36.8	.58	
AB-1 人には丁寧に接する	48.9	38.9	50.0	1.13	
AB-2 他人をあまり意識しない	21.3	25.0	15.8	.97	
AB-3 神経質である	66.0	27.8	34.2	14.45	**
AB-4 カンが鋭い	23.4	36.1	34.2	1.89	
AB-5 人とうちとけやすい	51.1	44.4	39.5	1.16	
AB-6 気分にもらがある	63.8	63.9	71.1	.60	
AB-7 人の気持ちをとらえるのがうまい	38.3	13.9	39.5	7.31	*
AB-8 よく気がつく	34.0	41.7	39.5	.55	
AB-9 文句が多い	48.9	50.0	50.0	.99	
AB-10 短気で怒りっぽい	53.2	66.7	50.0	2.36	
AB-11 くよくよしやすい	63.8	55.6	55.3	.84	
N	47	36	38		

注) **p < .01 *p < .05 + p < .10

らった。また、短大の学生祭において、筆者のゼミ企画である模擬店への来客に回答を依頼した。欠損値を除いた回答者は全部で163名であり、そのうち10代と20代の女性は131名

だった。血液型別の人数を見ると、A型47人、B型36人、O型38人、AB型10人であり、AB型の人数が少ないため、A型、B型、O型の計121人を分析の対象とすることにした。

3. 結

（1）項目の各血液型「らしさ」の検討

分析に先立ち、質問紙に用いた項目が各血液型の特性を表すものとしてどの程度認知されているのかを調べるために、現代ビジネス学科1年の応用心理学の授業時間を利用して、出席者に各項目がどの血液型の特徴を示すものであるかを判断してもらった。回答者16名の判断の結果を表1に示す。項目番号に付けたアルファベットは鈴木説において想定されている血液型を表している。なお、判断に悩むときはどれも選ばないようにしたので、項目ごとのパーセントの合計は必ずしも100ではない。

表に示すとおり、回答者の80パーセント以上が特定の血液型の特徴を示すと判断した項目は5つあり、そのうちの4つがA型という判断である。内容は慎重、神経質、心配性、丁寧であり、鈴木説では慎重と心配性はA型の項目だが、神経質と丁寧はAB型の項目とされていた。他に60パーセント以上の回答者がA型と判断した項目が7つ（A-1、A-3、A-9、B-7、B-9、AB-8、AB-11）あったが、そのうち出典においてA型の特性を表すとされていたのは3つである。

80パーセント以上の判断の一致が得られたのは他にはO型の「包容力がある」のみであり、これは鈴木説でもO型とされていた。し

果

かし、60パーセント以上の人がO型と判断した項目が他に3つ（A-6、B-1、AB-5）、B型と判断した項目も3つ（O-11、AB-2、AB-9）あったが、いずれも鈴木説では違う血液型の項目だった。また、AB型という判断は最高でも50パーセントの一致しか見られなかった。

（2）仮説の検討

血液型得点の比較 被験者が各項目を自分に当てはまるものとして選んだ場合を1点とし、鈴木説にそって血液型ごとに得点を合計して血液型得点を算出した。A型、B型、O型の被験者の間で各血液型得点の平均値を比較した結果、A型得点について有意差が見られた（ $F(2,118)=3.40, p<.05$ ）。平均値はA、B、Oの順で5.38、4.13、4.42であり、下位検定の結果はA型とB型の差が有意であり、A型とO型の差は有意傾向だった。B型、O型の血液型得点については有意差は見られなかった。

各項目の選択率の比較 全44項目について、それらの項目を自分に当てはまるものとして選んだ人の割合をA型、B型、O型の間で比較し、比率の差の検定（ χ^2 検定）を行った。その結果を表2に示す。有意な差が見られたのは、慎重、移り気で飽きっぽい、神経質、人の気持ちをとらえるのがうまいという

4項目であり、冷静という項目は有意傾向だった。慎重、神経質、冷静はA型者の比率が高く、移り気はB型者の比率が高かった。「人の気持ちをとらえるのがうまい」はA型者とO型者の比率がほぼ等しく、B型者の比率が低かった。

4. 考

短大生を中心に、若い女性の自己概念に血液型が及ぼす影響を検討した。まず、血液型性格関連説に用いられている性格項目について、それがどの血液型の特性を示すと見なされているかを調べたところ、B、O、AB型については判断の一致度の高い項目はごくわずかであった。それに対して、A型については一致度の高い項目が比較的多く（ただし、本論で出典とした鈴木説には必ずしも合致しない）、A型者のステレオタイプが世間的にかなり定着していることが示唆された。このことは詫摩・松井（1985）、松井・上瀬（1994）、坂元（1995）らも指摘しており、A型のステレオタイプが最も明確で普及していることは間違いないようだ。また、最もA型らしいと判断された慎重、神経質はこれまでの研究でも見いだされることが多く（樫淵・齋田・坂元, 1999；坂元, 1988；外山, 1986）、どちらもA型特性として広く認知されていることが改めて確認された。

次に、被験者の自己概念が血液型性格関連説にそった形で形成されているかどうかを検討したところ、A型の人のA型得点がB型、O型の人よりも高いことが分かった。これは仮説1を部分的に否定する結果だが、前述のと

残りの39項目については有意差も傾向も見られなかったが、その反面、どの血液型の人からも5割を超える高い割合で選ばれている項目も認められた（A-2、A-10、B-9、AB-6、AB-10、AB-11）⁸。

察

おり、A型の項目は他の血液型と比べてステレオタイプとしての普及度が高いため、このような結果になったことは不思議ではない。つまり、筆者の予想以上にA型のステレオタイプが明確で広範に普及していたことがこのような結果に結びついたと考えられる。

さらに、個々の項目の検討によって、A型の人には自分を慎重、神経質、冷静をとらえる傾向がB型、O型の人より強く、また、B型の人には自分を移り気で飽きっぽいと考え、人の気持ちをとらえるのがうまくない考える傾向がA型、O型の人より強いことが分かった。これらの傾向はすべてステレオタイプとしての判断のされ方と一致しているため（ステレオタイプのほうが血液型による差が極端である）、仮説2を支持する結果といって良いだろう。

これに対して、「包容力がある」はO型のステレオタイプであるが、実際にはA、B、Oのどの血液型でも2割程度の人しか自分に当てはまると考えていない。これは仮説2を否定する唯一の項目である。おそらく、包容力があるというのは他の特性に比べて社会的望ましさの高い、その分、身につけるのが困難な特性だからではないだろうか。

「包容力がある」以外にも、ある血液型「らしい」特性と広く見なされているにも関わらず、自己概念としての選択率に血液型による差が見られない項目も多い。だが、ある血液型「らしい」と60パーセント以上の人が判断している項目で、その血液型の30パーセント未満の人しか自分に当てはまると思っていない項目は「包容力がある」以外にはなかった。したがって、血液型による違いは生じていないまでも、ステレオタイプの特性が自己概念に取り込まれている傾向はやはり否定できない。

一方、それらの項目にはむしろ、仮説3のバーナム効果を支持しているものが認められる。例えば、心配性という項目はほとんどの人がA型のステレオタイプであると見なしているが、実際にはA、B、Oのどの血液型でも8割前後の人が自分をそうとらえている。つまり、A型の人は「A型は心配性」という記述を読むと「当たっている」と感じるかも知れないが、実はどの血液型の人にも当てはまる記述なのである。これはバーナム効果に

よって「血液型が当たる」と考えられてしまう仕組みを如実に表しているといえよう⁹。これほど極端ではないが、「少しのことですぐ動揺する」(B-9)と「くよくよしやすい」(AB-11)は75パーセントの人がA型特性と考えているが、やはりどの血液型でも半数以上の人が自分に当てはまると考えている。また、「短気で怒りっぽい」(AB-10)はB型の特性と考える人が比較的多いが、実際にはどの血液型でも半数以上の人が自分をそう考えている。さらに、どの血液型のステレオタイプともいえないが、「感情に動かされやすい」(A-10)と「気分にくらがある」(AB-6)はどの血液型でも6割以上の人が自分に当てはまると考えている。数として多くはないが、これらの項目は仮説3を支持するものといつてよいだろう。

本研究は被験者数が少ないことや、項目の選定の仕方などの点で反省すべき点が多いが、血液型と自己概念のあり方について、また、血液型が「当たる」と感じる仕組みについて一定の示唆が得られたと考えられる。

引用文献

- 長谷川芳典 1987 血液型と性格—公開講座受講生が収集したデータに基づく俗説の再検討—
長崎大学医療技術短期大学部紀要, 1, 77-89.
- 岩井勇児・鷹野美穂 1994 血液型性格判断に対する態度—人格的特質及び機能観との関連から—
愛知教育大学研究報告, 43 (教育科学編), 93-103.
- 上瀬由美子・松井豊・古沢照幸 1991 血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究 立川
短大紀要, 24, 55-65.
- 樫淵めぐみ・齋田順子・坂元章 1999 血液型ステレオタイプの構造と認知の歪み—重複性の効果の検討— 性格心理学研究, 7(2), 104-105.

南博 1983 日本的自我 岩波書店.

松井豊 1991 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短大紀要, 24, 51-54.

松井豊・上瀬由美子 1994 血液型ステレオタイプの構造と機能 聖心女子大学論叢, 82, 89-111.

村上宣寛 2005 「心理テスト」はウソでした。日経BP社.

大村政男 1992 性格検査の妥当性とはなんだろう?—「ココロジー現象」の流行に関連して—
日本大学人文科学研究紀要, 44, 1992.

大村政男 1993 「血液型気質相関説」と「血液型人間学」の心理学的研究Ⅱ 日本大学人文科学研究紀要, 46, 115-155.

坂元章 1988 対人認知様式の個人差とABO式血液型性格判断に関する信念—いわゆる「血液型性格判断」を否定する(1)— 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 52.

坂元章 1995 血液型ステレオタイプによる選択的な情報使用—女子大学生に対する2つの実験— 実験社会心理学研究, 35(1), 35-48.

佐藤達哉 1993 血液型性格関連説についての検討 社会心理学研究, 197-208.

佐藤達哉・渡邊芳之 1992 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究 心理学評論, 35(2), 234-268.

関根剛 1998 血液型ステレオタイプが自己概念に与える影響 和歌山信愛女子短期大学信愛紀要, 38, 21-24.

外山みどり 1986 人物情報の処理におけるステレオタイプの影響 青山学院大学短期大学紀要, 第40号, 129-148.

鈴木芳正 1984a 血液型セールス術 産心社.

鈴木芳正 1984b 血液型でわかる職業特性 産心社.

詫摩武俊・松井豊 1985 血液型ステレオタイプについて 人文学報(東京都立大学), 172, 15-30.

丹治哲雄・青木忠明 2001 大学生の「血液型人間学」に対する態度について—文教大学越谷キャンパスでの9年間の定点観測結果から— 生活科学研究, 23, 61-66.

渡辺席子 1994 血液型ステレオタイプ形成におけるプロトタイプとイグゼンプラの役割 社会心理学研究, 10(2), 77-86.

山崎賢治・坂元章 1992 血液型ステレオタイプによる自己成就現象—全国調査の時系列分析2— 日本心理学会第33回大会発表論文集, 342-345.

-
- ¹ 本論文は平成17年度の八戸短期大学現代ビジネス学科の筆者のゼミで行われた研究の成果をまとめたものである。
- ² 海外の動向についてはあまり知られていないが、溝口（1993）は有名な心理学者のキャッテル（Cattell, R. B.）やアイゼンク（Eysenck, H. J.）による血液型の研究を紹介している。なかにはキャッテルの16PFを用いて血液型とパーソナリティの関連を示した報告もあるという。
- ³ ただし、松井の分析は既存の社会調査のデータに基づいているため、統計的には万全であっても、項目が研究の目的に十分に適っているかどうかという点で疑問を呈することは可能である。
- ⁴ つまり、血液型パーソナリティ理論を否定する結果は重視し、それを支持する結果は軽視（あるいは無視）するという傾向がまま見受けられる。概して支持する結果はごくわずか（たとえば数十の項目中のせいぜい2、3個）であり、理論を裏付けるとは到底いえないのは確かだが、だからといって全く注意を払わないのでは、かえって研究の客観性に疑問を生じさせることにならないだろうか。
- ⁵ 星座も若い女性を中心にかなり人気はあるが、血液型ほど広範に普及してはいないだろう。
- ⁶ 大村（1992）はバーナム効果とほぼ同じ意味の現象をフリーサイズ効果といい、ラベリング効果、インプリンティング効果と合わせてFBI効果というものを提唱している。
- ⁷ 揚げ足取りをするつもりはないが、佐藤・渡辺（1992）がいうように、妥当性と信頼性が保証されていても、形容詞を用いた自己評定による検査は厳密にはすべて性格ではなく自己概念の検査である。
- ⁸ ゼミにおいて学生に結果を示して感想を尋ねたところ、「結局、どれも血液型に関係なく当てはまるみたい」という反応が得られた。これはまさにバーナム効果を指しており、それへの自主的な気づきが得られたことがゼミ研究としての最大の収穫であったと考えている。
- ⁹ 逆にA型以外の人がこの記述を読めば「なんだ」と感じるだろう。バーナム効果は大抵の人が自分以外の血液型の記述をあえて読まないという前提で効果を発揮するのである。しかし、さらにいえば、どの血液型でも自分は心配性だと感じている人が大勢いるにもかかわらず、心配性がA型のステレオタイプと考えられているというのも不思議である。ある意味でステレオタイプの強固さを物語る現象である。